

ノンクラスプデンチャーに関する現時点における (社)日本補綴歯科学会としての見解

先般、(社)日本歯科医師会より、「鉤を有しない部分床義歯（いわゆるノンクラスプデンチャー）について鉤を有する部分床義歯と比較した場合において、歯科医学的な見地から、どのような有効性等を有するか。」という問い合わせがあり、本学会としての現時点での見解を以下のように回答しましたので ご報告致します。

部分床義歯の安定には支持、把持、維持の3要素が不可欠であり、これらは支台装置および義歯床によって確保される。残存組織の保全に不可欠なこれら3要素の中で最も重要なものは支持である。通常これは、支台歯に形成されたレストシートに適合する義歯側の金属製のレストと顎堤粘膜へ適合した義歯床により構成されている。

「鉤を有しない部分床義歯（いわゆるノンクラスプデンチャー）」には、この「支持」に関し、あるものは外見上の理由から金属製のレストを含む支台装置を割愛し、支持のほとんどを義歯床に依存している。ここが大きな問題である。なお、この種の設計は歴史的に見てもほとんど稀な考え方であるが、教科書的に記載されているものには、残存歯により上下顎間の咬合支持が保持されている前歯欠損の症例に対する硬質のレジン床を用いた「いわゆるスプーンデンチャー」がある。

現下問題とされているのは、このような硬質のレジン床を用いず、軟質の義歯床材料で、しかも咬合支持の存在に配慮せずに、外観の回復という点のみから欠損歯列患者に対し喧伝されているいくつかの種類のものである。

これらの「いわゆるノンクラスプデンチャー」については現在(社)日本補綴歯科学会の中にワーキンググループを立ち上げ、日本歯科理工学会と協同して適応に関するコンセンサスを求めているところである。

いわゆるノンクラスプデンチャーについては外観の回復についての有効性という光の部分と、適応をあやまった場合に生ずる顎堤の異常吸収、支台歯の移動という重大な障害を惹起するという影の部分があり、その適応については今後のさらなる科学的な検証が必要である。